



里見八犬傳

第二輯

卷二



709  
7



門遠 13  
號 509  
巻 7



明治三十二年  
十月九日  
講非

南總里見八犬傳第二輯卷之二

東都 曲亭主人編次

第十三回 尺素を遺る因果とづらぬ 雲霧と拂て妖孽をよめて休

伏姫あきひめへあひくけり。奇くしん童こども小鏡こきやう繪えさとしを明あきらの眠ね覚さたのぐらさるる  
とぞあひの跡あとと免まぬぬ人の言ことふのあやれよ。まほ疑うたがひへたれなるあはれ涙なみだ乃  
あふ敷あふ妙たへの袖そではわくを勝かを絞しぼるむらう小嘆こなげくり。歎なげき沈しづせむひさる。まほ  
あはれ心操こころなへるむらう立たちる日ひ来きた雄おとしくは姫ひめうるあはれ。あは  
駿うまぐ曾むねとあはれ頼たのみかゝる黒くろ髪かみと。撫なあぐく目を拭ぬぐひ。うら  
かみ前世さへつよ又また造つくり罪つみの秤はかり成なりあひを輕かろさるあはれ。あはれとも遂つひにこのあはれ報むかひ  
まほ。かくまはるあはれ。人のうらこのあはれ。あはれ。あはれ親おやのうら。

八犬傳二輯卷二

山清堂藏

加座崇を履ゆえとゆみて、後のその後の世やうぐ。捺落の底に沈むも、  
 悔いとぞいづる由あざむ。只はがかりく悲しむ親の爲、又人の爲に違ま  
 心のくるく小竹に挿るる畜生の。その氣を愛く八の子を為し宿しるべ  
 けしめん。そのこの山小入りみ。一日より、鶴の林の老げえをこそ、就鳥の嶺の  
 身を仰ぐ。一念不退流經の外、八子小他事するさりのう。佛もてふ  
 救ひぬらんと神を助けぬらむとく。有れど、その実るふや、や臥房を  
 共みせむとこそ、そのいひ解人澄据はる。こがう人のそく親乃、恥九の  
 世を悔ふとも。竟み雪る時、あざむ。只畜生の妻といひ生ての恥辱  
 死してのうらむ。喩るは物あるべし。や。おとら鬼の毛乃末、おろく露むらり  
 ごとくあざむとく。曩小瀬田より、しとれ犬を殺しとめりとも。みゆ死  
 ざりしを悔いけと死べた折へあざむらむ。死かうとも業因致されば

善巧方便とく。鏡あつせのふらる。佛の書の中有り。た因果といふもあやう  
 あり。よやこの子の生るる。お小親同胞小幸あるとく。家の栄をやらせむとく。  
 まよるえ恥よやうえん悲しむら。と声立ち、傷の人小りのいひとく。そひ  
 凝てらたのうく小賢いれ公由乱とる。忍ぶはば、繁薄尾花が下小姉  
 の。秋の日影のさるとげら。昏間八月の各殘とて、岸小水浴り山鴨頂、  
 鳴るる。伏姫信と仰を、瞻つ現。が外小入由る。たすの。寔小畜生道  
 この身を劈く劍の山路小追登とて、阿鼻地獄後の世にひかへる。と  
 するふくも。彼童しを不思議る。こがま。くことひく。を。畜審ふ。とる  
 る。天眼通りとく。たる如。加旃抄のいひさる。夷山と山若ま。この山川より  
 委らる。禍福吉凶を断ると。只掌小指をふ似ら。い。人の指の神子。俯乃  
 老女といふとも。い。とら。う。た。こ。ご。る。べし。小。ま。は。れ。神。ろ。う。く。雅。る。復



長衣袂小魚縁く。後小眼死又先立尾を掉鼻を鳴く。はく迎入る  
うか如く。只管食瓜勸まどむ。伏姫ハスろく小入る由奇忌く。跡く  
く。絶て言葉もけり。石室の端ちううわく。硯は筆洗流し。ゆり  
まく。あつとふ。料紙の皺を引延し。こがう入控者の示現まで。  
辞み。うく。美理あう。いと哀まを。字め。折し。も。あれ水ハ瀬。や。う。ふ  
裏死く。三周大夫かう。と。想像ふ。く。松ハ。峯上。小吟して。有馬。白王子。が  
毎常を示せり。い。ゆ。人。より。今。の。世。より。賢。死。も。愚。ろ。も。直。死。も。曲  
ま。ゆ。も。薄。命。う。く。屍。を。溝。瀆。野。經。小。曝。せる。人の。抑。亦。い。く。む。く。む。  
そ。が。妻。そ。が。子。小。至。まで。ハ。数。侍。小。い。と。ろ。う。侍。べ。い。い。づ。ま。ハ。あ。ま。ど。こ。ら。が  
刃。却。と。り。例。ま。く。る。死。業。因。め。く。骸。も。ど。め。む。ど。失。死。と。母。う。傳。信。の。あ。ら。が  
そ。が。後。絶。も。果。多。り。ん。そ。と。わ。る。で。よ。在。さ。ば。と。も。る。死。後。さ。ハ。限。り。る。死。

嘆死灰倍させなる不孝の罪ハ賤ハ時さ。我遍思ひこえる人と。あ。く。ど。も  
あ。ひ。絶。さ。せ。死。ハ。只。恩。愛。の。鮮。之。許。さ。せ。あ。人。と。い。く。が。え。る。い。ん。が。根。傍。ハ。松。の  
露。袖。の。雪。下。も。末。竟。小。涙。乃。川。と。ろ。る。む。で。小。流。死。かり。ひ。を。水。莖。乃。筆。小  
い。せ。く。続。え。く。卷。え。く。嘆。息。い。う。ろ。く。お。死。思。ひ。め。死。西方。弥。陀。の  
利。劍。を。借。ま。く。煩。悩。の。羈。と。お。び。眞。土。の。旅。の。首。途。ハ。稱。名。の。外。あ。る。ま。ど。  
と。忽。地。小。ち。り。ひ。え。く。い。ん。を。う。ま。り。て。来。り。菊。乃。花。小。清。水。を。洗。く。茶。い。く。  
佛。小。子。向。なり。襟。小。掛。る。珠。数。を。取。て。推。搦。ん。と。う。あ。ふ。常。め。あ。ら。で。音。ハ  
せ。ど。ま。ハ。不。思。議。や。と。取。る。何。く。と。さ。る。か。う。さ。る。見。あ。ふ。小。数。と。り。乃。珠。二  
頭。ま。く。如。是。畜。生。叢。菩。提。心。の。ハ。の。支。字。ハ。跡。も。る。い。つ。の。程。ふ。う。仁。義。礼  
智。忠。信。孝。悌。と。ろ。り。か。ら。う。く。いと。鮮。小。続。ま。く。伏。姫。ハ。又。さ。さ。ふ。か。る。奇  
特。を。入。る。お。う。く。ち。の。不。疑。ひ。を。解。よ。く。と。ろ。く。は。く。く。お。り。ひ。あ。ふ。や。この。珠。数

ち免ハ仁義社智云々の文字あり。かく八房は伴とこの山小入と  
 せし比如是畜生云々とハの文字あるとて果しく伴の一句の  
 八房も亦あふ小菩提心を獲し。亦今又畜生四足の文字ハ失く  
 舊の如く入道八行と示させ入權者の方便測がじいと淡るすの  
 女の智をり。何と辨へ侍らんや。みん所瓜りて推とれハ吾侪と犬の  
 氣を受て平るるぬ身とあり。亦遂小非命と終る正畜生道乃  
 苦艱又似たり。ささども佛法の功力あり。八房さ小菩提入り来  
 世ハ仁義八行の入道はせり。亦示させのみの教りさあ  
 ぬハ八房をも。ささ小殺さば畜生の苦を抜く。ささとるる  
 いま。それハ不仁なり。渠ハその主乃る小大敵を亡した。か  
 是よる忠あり。又去歲よりこの山は吾侪ハ飢渴と凄せり。

か。又養ひの恩あり。ささ。や。末世ハ人と生れ。富貴の家の子と  
 とも。その忠この恩あり。の瓜今情あり。刃り。死を促さ小忍んや。これ  
 あり。瓜ありの随小告て生死を渠小任せん。さとして殊数を左小掛前  
 足突立ある。この眺めをる。犬ようち向ひ。やハ八房。ささ。瓜  
 侍けり。よ小幸なれ。の二あり。又亦あは。乃。さ。あり。則吾侪と  
 汝より。この國主の息女。さ。を。と。と。は。畜生小  
 伴。さ。この身乃不幸なり。さ。れ。と。穢。犯。さ。さ。ゆ。つ。の。く。も。世。を  
 逃。さ。く。自得の門。二。三。宝。の。引。接。を。希。ひ。く。遠。く。念。願。成。就。く。け。ふ  
 往生の素懷を遂るん。心。さ。この力の幸あり。又只汝ハ畜生なり。さ。ども  
 國小大功あり。瓜。り。く。聽。て。國主の息女を獲ら。入。畜。の。道。異。や。さ。その  
 欲を遂。さ。さ。ども。耳小妙法の。さ。を。聽。く。遠。く。菩。提。の。心。瓜。獲。せ。り。

此汝が幸ひる。まづ生をうえ形と変わつふよ。さうして。四  
 足の苦を脱とむ。まづ。ハその智とあひとる。死して。後その皮と剥き入  
 亦こと汝が不幸。汝生をうえ。七八年。犬馬ふく。そ乃命短く。や  
 びべ。つづ。小生を食。死。里。友。味。味。  
 答。打。呵。責。忽。地。その。及。及。又。この。山。住。とも。盟。より。推。亦  
 汝が。小。經。を。流。梵。音。耳。入。て。苦。提。の。心。遂。失。人。只  
 生。を。辞。死。と。樂。人。道。の。果。を。希。来。世。人。と。生。さ。う。ん。や。この  
 理。は。流。身。と。投。共。彼。岸。到。と。これ。と。て  
 時。早。り。浮。世。の。名。残。り。且。經。を。流。心。志。づ。小  
 元。は。汝。も。これ。を。聽。聞。く。讀。果。ん。と。と。起。て。水。際。赴。け  
 う。と。不。覺。命。惜。く。ハ。野。う。里。老。死。ふ。人。果。を。ゆ。り

と。八。房。の。頭。を。低。く。憂。ふ。と。又  
 尾。を。掉。て。如。く。又。感。涙。を。流。ふ。似。たり。伏。姫。ハ。この。形。勢。を。つ。く。と  
 見。ひ。く。犬。城。得。度。せ。り。怒。り。の。後。身。う。と。と。既。ハ。果。と  
 乃。と。ん。義。成。が。耳。孫。の。世。う。障。礙。ハ。あ。る。べ。し。心。中。に  
 と。思。ひ。と。思。ひ。彼。送。書。と。提。婆。品。の。一。卷。を。取。り。洞。と。此。と。又  
 出。讀。補。經。ら。ば。送。書。を。入。經。小。卷。籠。て。この。石。室。に。留。ん。と。思。ひ。ひ。つ  
 上。平。を。石。を。机。に。組。く。彼。一。卷。を。額。か。り。當。且。く。念。ひ。ひ。つ。を。や  
 續。出。る。八。房。ハ。耳。を。側。て。と。生。平。より。いと。切。り。折。提。婆。達  
 コ。品。ハ。妙。法。蓮。華。經。卷。の。五。に。在。り。娑。竭。羅。龍。王。の。女。兒。と。よ。八。歳。の  
 ち。智。惠。廣。大。く。禪。定。入。り。諸。法。不。達。苦。提。を。ゆ。る。縁。故。を  
 説。く。經。文。より。女。人。ハ。垢。穢。る。素。より。法。器。ハ。あ。ら。む。又。力。ハ。五



八代通二冊卷二

七

上三巻



八代通二冊卷二

上三巻



障むと故に成佛もつたれぬ。八歳龍女のむすめ。由無上  
 菩提をゆくり。便是女人のむすめ。成仏の最初なり。かまふ伏姫末期小及  
 びく。身のぬえ又犬のぬえ。提燈を流る。今瓜限。しどく。や。音声もく  
 澄澄。し。え。又委。蓮の糸を引く。又出水のま。似。峯の  
 松風のこ。和。谷の幽響。由。石を集。聴衆とせ。む。も  
 か。あ。け。の。愛。道。心。の。後。統。理。の。既。果。小。り。て。  
 三千衆生發菩提心而得受記智積菩薩及舍利弗一切衆生默  
 然信受と續。八房ハ衝と身を起。伏姫を見。久。水  
 際を指。前。の。岸。鳥銃の筒音。響。忽。地。飛。鳥。  
 ニ。つ。ま。八房ハ呪を打。煙の中。礮と什。あ。丸。伏姫。と  
 右の乳の下打破。苦と一声叫び。あ。巻。を。合。る。

横さぬ。樽。び。ぬ。時。去。歳。川。の。あ。雷。ふ。  
 絶。暗。間。の。鳥銃の音。小。拭。が。如。晴。年。な。不  
 一。個。の。獨。人。柿。の。脚。半。の。甲。掛。織。乃  
 獵。巾。の。緒。を。結。び。放。げ。頂。掛。け。右。小。鳥銃。引。提。て。前。面。の。岸。小。左。あ。ふ  
 流。水。と。信。と。て。既。流。瀬。を。知。る。岸。より。走。る。と。く。  
 合。る。鳥銃。肩。より。掛。て。指。て。ま。つ。この。川。が。急。な。れ。ど。も。  
 必。ず。似。き。法。水。ハ。高。股。を。浸。ぎ。彼。壯。俊。ハ。勇。て。勢。ハ  
 猛。虎。の。子。を。負。ふ。又。驕。象。の。牝。を。追。ふ。ち。ろ。足。を。踏。進。め。その  
 幅。十。丈。あ。り。る。流。水。を。切。く。瞬。間。は。あ。の。岸。小。走。あ。り。且。鳥銃。を  
 揮。揚。く。打。倒。し。八房。を。打。倒。し。五。六。十。骨。碎。け。皮。破。と。く。復。甦。べ。う。と  
 あ。ら。不。死。光。と。笑。く。鳥銃。投。捨。い。て。姫。人。を。と。石。室。の。中。に。進。め。

寄里とてんじふ亦伏姫の打倒さすく氣息はしとてはとてむるに駭きさすこと  
 なく抱き起し存里且瘡口を展檢る小車みくく残へ残り周章を懐  
 へると薬取取出く口中小泣き入る頻りは喚活を且とむす口の喉絶果て  
 全身へちや氷の如く縦元化が術あるとも救ふべうも見え多るべ壯俊へ  
 天もち仰ぎく教回嘆息し悲れうまうかろる所所謀る所へ悉鶻の背と  
 岩路ひ月来日来晴くく袂袂霧へ晴つ八房を替と多くく牙てんじふ  
 あやうとる九小姫う人さ入竟は緯絶あひみれた出後奇異るの犬めとあそ  
 ぶと固まごら禁制の山とあるま身を忘れ命を捨て姫う人救ひ  
 とるまおのうせんとあふ忠義へ不忠とありく又万倍の罪を贖せる百遍  
 悔ひ千遍悔とも今へもかるとるいひむらつとのやうに腹の切く  
 姫う人の冥土のあ俱仕らんあせ更と襟を被えく腰刀を抜出し

拭は巻そとんく南無阿弥陀仏と唱あふむたを刀尖を服腹へ突入と  
 ころ宿小維とあまを松柏の林が下小弦音高く射出を獵箭は壯俊か  
 めて右の臂射削りごえととらつとあふむらつと刀どうち落され驚き  
 ろがらええとへ樹間隠れ又声高く體ハ未未求むと日月の山の佐都  
 雄小遭ふけるかゆと口吟む一首の古歌よと何什磨維と問せも果む金  
 碗大補早もある且く等と鳴とあま里見治於大補義実朝臣熊の  
 皮の行勝は豹の尻鞘は條針しく弓箭携へ徐女小樹蔭瓜まきと出るへ  
 後方小続く後者るく堀内人負多の精悍は打拾くまの左邊小  
 引とふく義実忠義を伏姫の亡骸を屍目よりうけて寂期のふ  
 何とも宣つとちちやもほるとる落る珠数と送書をとるひて  
 差入あをととてふも自らあはる遠くくちてちのあうとる

義実朝臣ハ弓箭矢捨テ。殊数を刀の鞘ニ掛且送書を足ぬハ一寸一服  
 与ク。嗟嘆せしといふる。又貞形ハ由見せぬ。そが中ハ金碓大捕  
 孝徳ハ慚愧その刃を置ととろ方ク。額ニ冷死汗をる。刀を膝小ひえ  
 敷ク。只平伏してむろけり。當下義実ハ傷の石ハ尻を掛ク。孝徳ハ  
 うち對ひ。珍々。たぐる金碓大捕。汝不先ハ法度を犯シ。この山ハ入る  
 の。今伏姫とハ房をうち殺せ。赤仔細ありる。刃とささめ。迫う  
 糸。洋。と。狐。つ。ふ。や。と。同。も。孝徳ハ。意。も。う。も。こ。こ  
 面。く。要。時。財。を。ゆ。由。拳。む。この形勢ハ貞形ハ。そ。が。ほ。ろ。ふ。ま。と。出  
 大捕。序。統。ぶ。ゆ。む。且。刃。と。あ。さ。め。む。も。と。く。ん。答。派。ヤ。さ。げ。や。と。あ。く。い。つ。て  
 孝徳ハ。ち。や。小。頭。成。槌。刃。を。鞘。小。納。め。つ。挿。副。の。刀。カ。ろ。共。尾。を。六。堀。内。貞  
 形。小。進。ふ。く。些。一。引。退。死。又。貞。形。ハ。對。く。い。ふ。や。死。後。ま。る。る。甲。斐。小。國。ハ。由

君の。類。孤。拜。し。身。依。飲。び。も。重。の。越。度。も。く。後。悔。の。外。ハ。む。む。P。と。く。べ。死  
 千。万。句。も。この期。小。至。く。注。る。れ。西。形。乃。の。罪。を。飾。る。小。似。これ。只。一。條。と  
 中。上。入。去。年。安。西。景。連。ハ。謀。ま。る。く。安。危。の。お。ん。使。を。約。果。さ。ご。脱。れ。く  
 走。る。道。ま。が。ら。追。捕。の。敵。兵。と。血。戦。し。辛。く。瀧。田。へ。ま。る。る。ハ。景。連。が  
 大。軍。充。滿。楯。麻。の。ぶ。攻。圍。む。最。中。も。く。い。ハ。城。小。入。る。と。竟。小。協。む。と  
 切。く。和。殿。ハ。力。を。戮。一。臂。の。忠。心。盡。人。と。あ。つ。て。歸。く。東。條。へ。走。出。け。ど。も  
 その。甲。斐。も。く。彼。れ。を。甚。戸。納。平。が。大。軍。ハ。圍。と。り。敵。ハ。虎。口。と。退。う。と  
 夜。の。無。火。を。燒。あ。り。番。兵。と。り。由。割。せ。ご。も。六。翹。あ。り。く。城。中。へ  
 入。る。べ。う。ゆ。り。と。一。騎。あ。り。と。も。敵。陣。へ。突。入。く。死。な。や。と。あ。い。決。め。ゆ。い  
 ち。退。死。て。思。慮。成。め。づ。く。い。ハ。これ。も。亦。注。る。れ。所。約。ハ。五。指。の。か。つ。る  
 かつ。彈。入。り。一。巻。も。あ。り。と。は。西。城。素。よ。る。兵。糧。乏。し。寔。ハ。危。窮。存。亡。の

秋あり。さき鎌倉へ推し。管領家へ急報告援兵を乞催して西所の  
 田を殺崩さる君のおん為以上あじとさひえ。白濱より便船  
 多く彼れは赴き来由を述言急報告援兵を乞とひども主君の書翰  
 きたりぬ疑まづ。辨そののま。そなたのあるる日をも。空を  
 安房へ之を景連へたや滅亡。一國君がおんみふ属ぬ吁歎。ゆ  
 びふも寸功ゆめく阿容こと見え入りのに。然里とく今さう  
 腹も切さむ時節を俟て功を立帰る願ひをせん。そとあつて乃  
 隱宅ふとく舊里をよ上総る天羽の園村に赴き。祖父一也は由  
 縁ある社客某甲が家よりをよせ。つとととく去歳と暮れ今茲ゆ  
 おの秋の色深く潜びくゆひ。本月の初旬。姫入のつ戻りて八  
 房の犬小伴と富山の奥へ入るひれ。と慥はあはれ告はりのあり。こ

未曾有の奇。矮より。偏小主君の瓊瑤よりや彼犬年ありて人を魁る  
 靈ありとも目小遊るのるる。撃ふとてやある。竊小富山ふこ  
 登り犬を殺し。姫入を殺し。先非狐贖入。歸系のよま。か  
 まふゆ。と尋思。潜びく當國小立。准佐の鳥洗引提。こ  
 山は入る五。六日。姫入のおん所在を只。願索なり。あるこの山岸。み  
 袂霧ふく。て。一日。由晴。とて。狐ゆ。とて。水の音の。凄。く。廣陝深。深。ゆ  
 測。か。里。蚤。崎。輝。武。が。溺。死。の。り。さ。火。使。く。ゆ。が。あ。る。る。と。推。量  
 あり。か。ろ。く。ま。く。は。ゆ。法。さ。か。川。一。條。は。隔。ら。ぬ。奥。方。狐。入。る。と。か。る。る。後。が。  
 け。を。空。く。暮。ま。う。と。ま。の。う。頻。ア。ふ。焦。燥。の。果。ハ。疲。勞。く。水。際。の。松。小  
 尻。も。ち。掛。る。る。か。む。む。と。の。も。ん。ま。と。の。え。ぬ。溪。洞。の。と。か。う。あ。け。の。あ。は。り  
 経。よ。む。声。の。と。も。幽。又。ゆ。め。え。り。ま。ん。や。と。騒。ぐ。宵。月。を。結。め。水。際。は。ま。く。と。て。

耳を側く。つくと何の女子の声んら疑へば。由あらず。姫入は。おまへ  
 下。既よそのおん声をや。ついま。おん姿を。見るま。より。この時。て神明  
 佛陀の冥助を仰ぐ。おあざりせ。ば。土灰。遂之。けん。當國。洲崎。大明神  
 那古の親音。大菩薩。孝徳。が。忠義。空々。く。の。袂。霧を。おさ。め。く  
 この川を。輒。く。こ。こ。させ。ま。う。と。丹。絨。を。抽。つ。且。く。祈。念。して。目。を  
 見。け。不。思。議。なる。今。ま。でも。黒。白。を。こ。ぬ。川。霧。も。我。か。如。く。暗  
 こ。の。前。面。廻。し。眺。望。目。石。室。と。お。ぼ。え。存。と。ま。お。ん。え。を。あ。め  
 姫。入。る。り。お。ひ。より。願。へ。法。何。で。お。あ。る。勇。ま。り。入。既。よ。こ。こ。さん。と  
 ま。る。箱。八。房。へ。あ。る。く。狐。見。て。や。水。際。狐。指。く。走。り。ま。ん。這。奴。よ。せ。つ。け  
 て。お。あ。る。ま。る。入。替。と。お。い。く。後。小。丁。を。被。ぬ。へ。お。あ。め。と。お。い。く。矢。じ。ろ。の  
 後。よ。く。り。ぬ。食。る。鳥。焼。取。る。所。祖。固。め。二。こ。の。火。蓋。を。切。る。を

おまへ。おん。水。際。よ。し。ま。り。か。物。獲。つ。と。早。川。の。水。より。お。や。つ。ま。く。  
 おん。又。姫。入。も。お。ま。れ。る。丸。は。傷。ら。し。く。お。ら。が。枕。は。ぬ。の。ふ。こ。り。け。さ  
 とも。瘦。へ。残。る。身。の。為。命。と。い。ひ。さ。る。毛。を。吹。く。疵。を。求。め。る。  
 後悔。其。効。亦。立。さ。ざ。り。切。く。冥。土。の。お。ん。俱。せん。と。既。よ。先。移。狐。壳。一。折。  
 死。ひ。ら。り。く。君。お。お。れ。な。り。約。死。さ。る。と。天。罰。さ。る。法。度。を。犯  
 せ。く。この。山。の。お。ひ。入。り。の。ま。ら。姫。入。さ。る。お。害。ひ。は。八。逆。の。罪。人。  
 君。が。お。お。く。刑。罰。を。希。ふ。外。ゆ。り。堀。内。ゆ。り。籠。入。り。の。索。う。け。る。人。と。背  
 する。お。お。め。が。う。り。つ。い。わ。り。身。の。孝。徳。が。忠。心。城。よ。く。お。ら。る。ゆ。り。  
 ろ。毎。ふ。点。鼓。の。ま。主。君。の。氣。を。狐。同。へ。義。実。嗟。嘆。大。く。こ。り。ま。し。且。して  
 室。お。お。り。視。禍。福。得。失。入。力。を。り。く。よ。し。さ。る。凡。智。を。り。く。揣。へ。く。も。

大捕は汝は是ふその罪あるに刑罪道とくくるといふも。伏姫が死へ  
 天命あり。渠が汝はももといふ。かろくどこの川の水屑とてん人  
 その遺書を續けさせよと宣ふ。うけぬつと意つ。大捕はほとふ  
 つぬぬ。首より尾りまが。高かろく續わどふ。孝徳やましく。慚愧しく。  
 伏姫の賢才義烈又感涙を拭ひぬき。いよ麻呂が悔歎を續果  
 けしん。後室へ又孝徳ふらち。對ひ大捕何とまらぬ。伏姫が死と  
 禁んとく。こと亦潜びく。まらふあふむ。世度五十子が病著へ只  
 伏姫を愛惜の心氣疲勞とく。危急及ぶ。渠が死ひとぞ。と  
 ろく。を異し。この山の奥にん。と公のとなり。とるわうさる  
 折。ことこのもろく。人さ。如此。この示現を。後者ホを麓に留め。只。ことと。自れ。この山に。登る。め。の。示現。

任し。川を。水上を。この石室の。北。月。到。り。  
 主後既ふこの。伏姫も。八房も。矢庭。又。撃。と。く。折。く。川。を。  
 来て。伏姫も。八房も。矢庭。又。撃。と。く。折。く。川。を。  
 歩。の。同。伏姫。が。雙。言。と。けり。と。つ。て。れ。ハ。雲。時。樹。蔭。ふ。  
 餘。ひ。く。緯。の。中。の。穴。窺。ふ。山。豆。の。り。や。癡。者。ハ。月。来。日。来。あ。ら。ま。り。  
 金。碗。大。捕。る。と。ん。と。渠。驢。ぎ。と。け。ち。ら。り。く。姫。を。活。め。盡。を。療。  
 養。老。ふ。届。む。と。く。自。殺。の。先。期。ハ。野。心。の。く。姫。を。殺。せ。り。の。な。り。次。に。  
 心。ひ。け。は。鳴。と。先。う。汝。み。づ。く。思。惟。よ。犬。と。殺。し。伏。姫。を。さ。く。ひ。  
 ぞ。の。の。の。義。実。あ。よ。あ。恥。を。か。び。最。愛。の。女。兒。を。さ。く。け。ん。  
 女。の。の。の。ん。や。賞。罰。ハ。政。の。樞。機。の。言。一。と。び。あ。と。死。ハ。駟。を。  
 舌。及。む。銭。言。と。い。も。八。房。よ。こと。伏。姫。を。行。し。り。この。一。言。を。剛。敵。

亡び四の郡ハ義実ガ堂小入匠の只ハ房ガ大切なればこれ由も前諾を  
 變つふ由らぬ。姫も亦これ狐固辞つて。そかやう犬小伴は蹟を深山に  
 住むといふも。幸ありて穢さるる。一念統經の功力よりあつて。八房  
 に入ふ菩提に入りぬ。渠が燐欲るを忍び。伏姫とて狐憐れ。憐れか  
 げくまゝ。まゝとてその氣狐感。有身するといふく。奇なり。  
 今その筆の迹狐つら。この禍の胎するところ。因果の道理を知覚せし。  
 こと當國ハ義兵を揚ぐ。山下定色を討つ。と死その妻王持と生拘つ。  
 陳謝理りあるふ似て。お救いゆせんといひつる。大捕ガ父八郎孝吉  
 のて。練く既瓜刻なり。あはれよ。あはれよ。その冤魂。主従小崇狐のま  
 軟とて。めてかつた。と。入金碗孝吉。自殺のと。死。朦朧と。と。八  
 房の姿。眼は。遮り。あはれ。かくて。かの玉持が。うら。と。ハ。あ。小。嘆。つ。と。八

房の犬と生うら。伏姫をぬく。深山邊に隠る。親小お狐。あはれ。せ。  
 伏姫ハ入。あ。ひ。ひ。あ。八郎が子ハ。お。加。以。大。捕。ハ。罪。あ。り。と。く。  
 亡命ハ。忠。義。小。よ。つ。つ。罪。狐。獲。と。皆。是。因果の係ると。縁故を推し。え。ハ。  
 印。と。り。義。実。ガ。徳。より。起。と。り。物。が。い。れ。せ。と。く。八房ハ。伏。姫。を。好。せ。と。救。を。  
 せ。と。り。玉。持。を。助。ん。と。い。ひ。口。の。過。去。の。露。ハ。未。竟。と。の。溪。洞。小。落。あ。て。  
 づ。と。り。山。ハ。生。死。の。海。を。見。る。と。悲。し。け。し。と。と。く。歎。く。と。と。く。途。を。ま。て。  
 る。あり。神。灵。小。正。あり。邪。あり。神。の。怒。る。狐。罰。と。い。ひ。鬼。の。怒。る。狐。出。示。と。  
 い。ひ。被。玉。持。ハ。悪。灵。あり。伏。姫。ガ。死。ハ。崇。ろ。の。大。捕。ハ。父。ハ。脱。且。を。不。憶。罪。を。  
 ぬ。と。り。宜。小。故。あ。つ。つ。の。た。の。と。バ。憾。と。み。せ。と。身。を。體。て。い。と。叮。嚀。小。論。と。  
 あり。睿。智。ハ。感。と。く。孝。德。ハ。あ。ら。む。小。膝。を。進。め。神。鏡。と。よ。り。て。父。ガ。自。殺。を。  
 月の落命。あ。あ。あ。と。小。足。れ。と。と。と。猶。疑。ひ。あり。八房。と。と。と。小。善。口。

搜み入る。悪霊出る。あまをばうらむ。君ハ權者の示現。ふらむ。姫うら  
 紡せむ。縦定業。まあり。まきと。神仏のち。うらむ。けい。一日。うら  
 る。姫うら。あま。在。ま。づ。た。山。その。甲斐。うらむ。うらむ。故。うらむ。  
 と。同。な。れ。ば。貞。多。ゆ。小。藤。瓜。拍。く。側。と。大。捕。微。好。や。と。う。こ。が。君。の。ま  
 ち。ゆ。ま。ご。一。下。日。を。晴。ぬ。川。霧。の。忽。地。晴。ま。し。和。殿。か。え。も。神。佛。の。冥  
 助。あ。る。ふ。似。く。その。実。は。ま。の。難。あり。こ。ま。の。の。り。の。其。由。と。後。ゆ。く。ゆ。と  
 真。実。ご。も。て。ア。ス。も。義。実。朝。臣。うち。点。改。これ。も。亦。神。る。ゆ。後。定。う。小  
 名。以。辨。法。とも。禍。福。ハ。糾。る。纏。の。如。し。人。の。命。ハ。天。ハ。保。ま。り。これ。の。山。ハ  
 到。む。く。伏。姫。む。ら。く。う。ら。ん。の。渠。只。犬。の。妻。と。う。ら。ん。人。則。姫。が。節。操  
 徳。義。と。八。房。が。菩。提。入。り。瓜。親。の。世。も。あ。ら。せ。ん。と。て。控。者。の。導。き  
 ぬ。ら。る。え。然。あ。ら。ん。中。玉。蜻。の。息。あ。ら。う。ち。あ。ら。む。と。も。の。甲。斐。あ。ら。し。り。の

へ。く。と。又。川。霧。の。晴。間。あ。く。伏。姫。も。八。房。の。大。捕。ハ。懸。ま。り。瓜。ハ。共。ハ  
 この。川。の。水。屑。と。う。ら。ん。の。縦。送。書。あ。ら。し。り。の。と。も。ま。ら。う。の。の。ハ  
 情。死。と。い。ふ。状。さ。て。送。恨。の。り。の。ま。ら。む。や。今。さ。う。い。ふ。べ。ら。る。の。ゆ。え  
 と。大。捕。が。父。八。郎。ハ。功。あ。ら。う。の。ゆ。え。賞。を。受。む。自。殺。世。事。不。成。ん。  
 つ。く。その。子。を。と。り。ま。す。東。條。の。城。主。は。せ。ん。伏。姫。を。め。て。妻。せ。ん。と  
 る。折。う。大。捕。ハ。使。して。送。よ。の。ゆ。え。伏。姫。ハ。八。房。ハ。伴。ま。す。深山。ハ  
 入。り。ぬ。あ。ら。至。ア。く。予。が。宿。念。画。餅。と。う。ら。む。て。い。ま。ま。く。と。後。ま  
 愧。る。と。ま。ら。う。と。この。昏。縁。ハ。明。地。と。り。結。縁。ハ。あ。ら。後。とも。親。が。む。ね  
 許。せ。く。伏。姫。ハ。示。し。神。童。が。言。ふ。ふ。も。親。と。夫。ハ。あ。ら。ん。と。い。ひ  
 久。夫。ハ。汝。を。い。ふ。う。ら。ん。か。る。右。小。姫。と。犬。と。大。捕。ハ。撃。つ。の。ゆ。え。状  
 則。權。者。大。方便。の。妙。所。と。い。ふ。ゆ。え。因。縁。か。の。ゆ。え。あ。ら。ん。



元 誰をうけ維をう眼ん弦強けまふかふのび弛む物極むかかふるを休  
今よりとして「うが家」は「霊の障礙」をあらへるを子孫にまわす「誓目」  
せん致さんんまやと諭し身入の貞節も孝徳も疑念の春の氷の  
とく解く落涙あふりける且しく孝徳へ襟うけ合せ形改免  
冥加は餘る君の高恩は白月中に秘させまひし婚縁のつらさを  
うけるもんも物休る。固よりとあらぬとあらう。ころありて娘人を  
救ひとんんとせしとめや。と後まぞ入りのへううん只連は某が頭と  
刻させまへう。と又死るもまぐアけるも義実と身は成ゆの末にこそ  
勿論のうらそ。さるるうら。むかひけくつうく。こころ伏姫が瘡へい  
法うら。一難生まらぬあふん女を殺すも早うとまや。これ熱この  
珠数をえらふ。如是畜生云々の一句へさうふすめふかへるう。

仁義八行を示しとめら。靈験の失へうまを介は小姫が倒るるとんこの  
珠数その身と離さへん浅残るまとも絶え入る渠の辨れ時よりし。  
あの珠数をうく安危を知り。維命数彈むとも。祈りハ利益るのえ  
とあふんや。縛協はんは罪ゆる。かてや巳人と朝小掛は珠数とこ  
あけく額ふち一當且く念づく伏姫の襟ふつう。拭るふ負ひ孝  
徳左右よ。むるしき骸を抱起し。後行者の名号と唱く。只願祈  
念まは後小伏姫忽地目と睨まう。一息吻とつれぬ人。負ひ孝徳致  
喜小姫む。姫うぬあうつうせまふ致入るていそ大辨まうゆそ。おん  
父君もつらうせめひぬ。おん心持のいふひそや。とどのまう。左右と見  
えつらう。取らまうるふ。致ち諸袖顔ふち一當て只潜然と泣まふ。  
現理りと義実の間近くあう袖引揺。伏姫さめを愧あふるまう。

主後二人の。後者ホハみる。麓ニ在リ。此度母の願よりて。義実み。此  
 う。未つる。一朝の議。あま。權者の示現。よ。あ。八房が。う。  
 又八房が。う。又。送書。を。あ。余。金。大。八房が。  
 上。の。あ。弱。の。縛。  
 顛。末。同。由。定。め。た。あ。を。救。ひ。と。う。ん。と。う。こ。こ。より。先。小。こ。の。山。小。  
 潜。び。入。つ。八。房。を。撃。倒。し。う。九。板。て。あ。も。由。浅。残。を。負。多。り。八。房。が。  
 死。ハ。不。使。る。と。い。も。大。捕。小。智。も。一。う。是。亦。因。縁。あ。れ。小。あ。ま。と。渠。も。  
 こ。あ。ろ。う。と。ろ。う。女。婿。あ。せ。む。や。と。思。ひ。の。ん。さ。さ。が。て。書。送。さ。れ。  
 神。童。が。言。ふ。あ。も。親。と。夫。小。あ。も。あ。の。り。や。枉。く。滝。田。へ。立。入。り。病。  
 體。ひ。母。が。あ。ろ。う。瓜。懸。め。あ。や。伏。姫。と。理。理。切。て。諭。し。あ。の。身。小。の。あ。  
 と。も。小。神。歸。館。の。り。勿。論。一。旦。の。義。よ。あ。ろ。う。八。房。よ。は。一。年。あ。り。

この山小隠りあへ。その事果。う。う。や。是。よ。う。道。世。の。お。人。志。あ。く。と。も。  
 此。考。終。あ。ろ。う。え。ご。う。ん。と。あ。う。ろ。う。の。賺。し。の。勤。王。を。ま。り。し。て。  
 伏。姫。ハ。涌。之。所。涙。を。ま。ぐ。く。押。拭。ひ。舊。の。身。小。く。あ。う。た。の。を。親。乃。  
 む。ろ。う。迎。へ。あ。仰。が。背。き。た。う。ん。や。か。う。ま。で。過。世。何。列。の。山。の。歎。小。異。  
 う。う。火。鉦。は。打。と。く。対。を。終。里。う。い。入。る。と。く。小。外。と。る。罪。滅。し。よ。  
 う。う。ん。ふ。そ。し。も。か。う。ろ。う。む。と。う。き。こ。の。形。容。を。親。よ。う。ん。せ。人。よ。う。ん。  
 う。う。く。阿。客。と。い。づ。の。里。へ。か。う。ろ。う。だ。餌。は。啼。く。鳥。の。巢。ご。ら。せ。と。  
 う。う。片。羽。ろ。う。子。ハ。可。愛。さ。も。ハ。し。や。と。と。鄙。語。小。の。く。や。と。軟。飽。と。て。ふ。  
 う。う。慈。愛。せ。ら。る。家。尊。家。母。の。お。ん。歡。き。聲。言。て。い。う。夜。の。鶴。つ。ま。恋。せ。ね。と。  
 う。う。こ。も。又。燒。野。の。雉。子。印。と。鳴。く。涙。の。兩。ハ。沸。之。り。こ。れ。え。侍。ち。て。苦。し。免。  
 う。う。海。を。け。脱。れ。ん。と。命。毛。の。筆。小。述。せ。う。く。を。何。と。う。ん。と。せ。あ。ろ。う。ん。





肚を裂く  
伏姫八犬子と  
走らす

伏姫

伏姫

牛も使



内侍

金葉木

里見

八犬傳二巻

山青堂

虚室小舟と云えし。珠数ハ忽地弗と彫離まら。その一百も  
 連続し小池上へ鼻と落さむらと空に送るハの珠も繁然と  
 ひろく光明をたもつ。此遠り入素ま。赫奕する光景ハ流る星よ  
 異るま。主後ハ今さ。小娘の自殺成禁めあへど。これもあふ  
 蒼天をうち仰ぐ。目も見白小。あま下。とつる程小颯と五日  
 末山おろし。風のちやくハの灵光ハ八方に散失。跡ハ東の山乃  
 端ハ夕月のそご。昇る當是教年の後ハ大士出現して。遙に里見此  
 家ハ集合萌牙とあふ。ゆらくくるべ。かくても。姫ハ深疾ハ屈せ。此  
 飛去る灵光を目送。致しやく。腹ハ物。くまらる。けり。  
 神の結び。腹帯も疑ひも稍解。こころ心小か。雲もた。浮世の  
 月成え。す。のそぐハ西の天よ。道。見。人。弥。陀。仏。と。唱。も。あ。へ。む。

て。靴も鮮血に塗る。刃を抜捨。そ。あ。礫と姉。あ。さ。言。ふ。と。女  
 子。あ。似。げ。る。兄。あ。く。小。逞。志。死。童。期。ハ。特。は。あ。ら。さ。る。と。

第十四回 轎を飛く使女溪洞を涉 錫鼓鳴いて大記總と索

か。ら。う。小。舟。と。云。え。し。身。負。竹。ホ。ハ。伏。姫。の。自。殺。を。禁。め。あ。ら。さ。る。も。押。頭。の。花。を  
 散。せ。し。く。遠。感。さ。る。と。う。り。け。し。そ。中。小。孝。德。ハ。男。子。也。と。ま。り。姫。君。乃  
 末期の一句小激さ。才を措と。ろ。なる。と。人。亡。骸。の。や。り。小。お。ち  
 くる血刀をよ。取。て。焼。び。腹。を。切。り。ん。と。と。その。と。死。実。実。声。を  
 ぬ。ら。と。大。捕。狼。狽。さ。る。故。その。才。小。大。罪。あ。ら。さ。る。が。ら。君。命。と。俟。む  
 ち。く。自。害。せ。ん。と。奇。怪。る。伏。姫。一。旦。甦。生。と。ハ。罪。一。等。を。宥。む。と。と  
 この山小入るのハ頭を刳人と掟の瓜法度を枉てあのがやふく腹切る

且瓜聽んや観念せよと進まゝと刃を引投なま身みハ願ねがふと為なと孝徳ハ  
 居ゐる所ところに合あつて項かたを延のびて給たまはる上かみ小こ見みえく刃やいばの稲妻いなづまと打うつる  
 大おほ刀やいば風かぜと吹ふひりりる孝徳こうとくが髻むす非ひと截きり捨すめ人の足あしハと足あし入いる罪人つみびと也  
 練ある後のちより負おつちも驚おどき必かなず仁君にきみの恩おん義ぎとよと畏おそる長実ながみハ氷こほりを  
 刃やいばを女をと韃た小こ納なめく流ながる決けつをぬき拂はひてや為人ひとにが身みつた罪人つみびとを  
 刑罰けいばつせり。法度ほつとハ君きみの制せいまる所ところ君きみ又またて瓜うり破やぶるといふ古人こじんの金言きんごん宜よろう  
 うふこと此こゝの民たみとわろ共ともふらふこの山やま小こ登のぼりて大捕おほとら小こ外そと口くちをくち閉しめして  
 代かへる髻むすハ渠みちが亡なしへ寸すん志しるの渠みちが擗なき時ときよりあま名なを大捕おほとらと喚よぶ  
 做なせしハ大國おほくに輔佐ほそさの臣おみととその久後ひさごを祝いわせし小こ官職くわんしやく由よしや進まりて  
 治部ちぶ大捕おほとらと大捕おほとらと。その國訓くにのしんハ異ことなると大文字おほなふじハかろぬ主後しゅご同名どうなかろ  
 故ゆゑもや主しゅのうへよあまあま死し崇たか祭まつり才さい小こ受うへん可あ惜あしあ壯さう伎ぎがあまあ埋う木きと

りかんと。かゝるも不便ふびん親おや八郎やちろうハ大切おほせき也なり大捕おほとらも忠ちゆうるれよまをこの  
 親おやとのひその子ことのひ勲功いんこうあまとも賞しょうを獲えむ。その死し小臨せうりんと。その罪つみ小  
 陥おとるふ及びおよびて主尚しゅしやう救きうふ小こよりるれ。こが子こ小こあま哀傷あゐせうの決けつハす  
 禁いめらに。中なかつ大捕おほとらよ孝徳こうとくよこがけら瓜うりよくも知しるハ亡親なげおやの為ために  
 命いのち必かなずち身みを愛あいし。佛ぶつ小こつへ苦行くぎやうハ高僧こうそう知識ちしきの名なを揚あげよ。あま為なり  
 ころとや。と叮嚀ていねいと諭さとし。身みハ孝徳こうとくハ辱おとしるふふり落おつ。決けつ又また嘆なげび地ち伏うつて  
 應おこす後のちつ声こゑを咽のむ。理こと正ただし。負おつちハ鬼おにうちうて進まり出で今いま小こあまぬ  
 君きみの仁心にしん。姫ひめうへの也なり。最期さいごの脚あしうまうまききりて家臣かしんのうへ瓜うりかくまふ  
 仲なつのえさせむふ。大捕おほとら和敏わみんが身みととて一郡いちぐんの守護しゆご万貫まんくわんの禄ろくあまや  
 満み足たりる人ひと。といふとくかやうやく頭かぶを擡た某なつか寔じ小こ不肖ふせうる也なり。如ごと是ごと畜生ちゆうじやう  
 ごと菩提ぼだい根こん入いる。今いまよと日本にっぽん廻國かいこくハ。灵山りやうざん灵社りやうしゃを巡めぐり。伏姫ふせひめ君きみの後のち

世瓜吊ひくが君の父子の武運を祈る姫への落命也又某が祝髪も  
 八房の犬中なるは犬とのみ字と二つ小登置さ犬の中及びぬ大捕が犬の一字と  
 ころまふ、大と法名付さんとや上と云ふ民実朝臣適ひくをせし件の犬も  
 全身は黒白八の斑毛あは八房と名づけしが今さう思へば八房の二字ハ則  
 一尸八方お至るの義あり加辨伏姫が自殺の今果小痰口より一道の白氣  
 ころり仁義八行の文字顯して百八の珠因を冲正又字を丸珠ハ地  
 墮るその餘のハも光明ををるち八方へ散れり遂に跡をくまらぬ  
 其所以あるはあはるる後ふ至るまで必ひあらざるのやあはるる菩提乃  
 首途の餓別あは只この殊教はまことのあは努秘養せよ入道と諭して歸て  
 賜ふは孝徳ハも小受て再三とびうち載きこゝ有るは君の賜の今より  
 緒圓編歴しと飛去るハの殊の落るは瓜當給めとめとめのとて轢き

とらん、百八の数は満ち又當國へ立え里く見糸よ入りゆは年瓜歴るとも  
 音耗るは旅より行は野ざしの骸ハ餓る犬の腹を肥し小なりと思ふはよ  
 是を定ふ今生のおん別小ゆへとと思ひ切くぞやけるこの時既小日ハ暮る  
 夜ハ初更のころるるは日ととと程明るよける月ハ半輪の雲もろく山ハ  
 萬樹の影あり響きたは水の音、颯きたは松の声、賜を對蝶るは小鹿ハ峯  
 上小鳴く白露の霜とろるは悲しと根ハ幽谷小叫く孤客の夜衾を寒しむ  
 早よ来て坊も寂しき深山山路ふつと口ハ吐りかくまら行はまはらん  
 伏姫の瓜のま、主後頻る小感嘆せり當下堀内負仍ハ孝徳ホと幾く  
 のまら姫への自殺よりく時瓜移させむは日暮山ハ峻しき小川下  
 向ハ瓜のま、ささふとく夜もふあつ明させむはるのあん亡骸をいつ小せん  
 毒蛇猛獸の患はとらへるを進退究め難義々和殿ハ方年とら

名ひ多ふと聞きし雲時沈吟しつゝ所理をえとみく曉させ多し遠慮  
 する小似たり所詮和敏と某と姫の亡骸を昇りて「か君へ此をばら  
 蕉火を把せよ」と下山をいせせり人軟麓へ入る但の人を前めよ  
 ぬとけ多し且へ迎ふよ「幾そのめ共耳怖し」とこの溪洞を流さざり  
 前面の岸よりあつてみく遭ふと「さあおじ」との聲へいつとち相續ふ  
 義實こそ狐使も伏姫も只ひとり去成りて小在りけるの狐  
 弓箭とる力の主後二人毒蛇猛獸をおそろく為一夜亡骸と成るとか  
 つと遠く麓へささるや此をせよ彼狐も小男見ふしく「さあ伏  
 姫が心操親さうささめをじ五十子と泣きささる公よつとむとるぐと  
 みがう姫を給し今とす慚愧は堪えらぬこの命今その死に及びて  
 こそ一滴の涙とこんせと魂魄いまごとく狐まさるさへ汝達が幾論女こ

とく伏姫小笑まると枝瓜をささる火と焼つけよ「こそ由割菴を印しくべ  
 つとく」と宣ふ貞の孝徳感激しく且伏姫の亡骸を洞の中へ入るお  
 らせ主後石山の樹下小團坐して老づ小天の明る狐やささる「流れは前面の  
 岸小粒の焦火閃々人殆ど焦火のやえり貞の還よこ狐入るこ色ハ」を  
 人がおん迎ふよ「ささる」のでやこの漸次流せんとひも死らむ樹と立て軀く  
 水際よまり出其れ小いなり蕉火へおん迎の人と「ささる」おん迎ふこ在まを  
 吾們既小この川流せり風竹とささる人みく流まら緩く瀬ハ浅しとく  
 けん蕉火をもちこちと閃く坂をささる岸小をり立とお不くて先よまむ  
 ぬ後不続くの馬を牽入る声をおい人駭然し「ささる」この岸小狐  
 入るおん迎ふ女轎を釣基とささるおん迎ふ拈念徒たの男七八人赤裸ま









八代傳二輯卷二

九六



使女  
急松乃  
水に涉る  
夜

堀内自刻

八代傳二輯卷二



洞を指く事つは此の曉小長實瀧田へ帰館の折途と自ら奉て麓の  
村長と法師們又云の仰成べく俄頃又棺葬貝を造らせ金碗大膳小  
進与とこの山深く遣けつ又この日より携夫炭焼まて山押するの  
富山を上下まると瓜許のふささぶ孝徳入道ハ件の棺を受とりて且伏姫の  
亡骸と歛め存置則洞を截ひて置く。お人墓所とを造るとも碑碣も  
只松拍双立く自然と墓標とあり。人とは瓜焼へやめこし瓜喫く義烈節  
婦の墓といふ入八房をも土葬せしむ。こゝ瓜へ只龕小歛く敢亦棺を用ひ  
さへ伏姫の墓をまるとこ丈なる成の方。老る擡掛の下小瘞む人亦  
喫く犬塚といひる。葬ののみの如く。よろの質素にせしむ。ハ義実豫て  
孝徳又仰つけしむ。所へ姫の志操を汲く事果く拍田拔織を彼  
十餘人の奴婢瓜ぬく。法々瀧田へとも帰し。麓の法師村長もこの

里へ歸りふるとその中小金碗大膳孝徳へ圓頂黒夜小容瓜とて、大坊と  
法号し且山は苗とて伏姫の遺し。又法華經を統編すると。一日一夜も  
廻る。四十餘日とびびり。さゆ福小瀧田へ五十子の方の葬式をやり行  
る人々のおんぬ小米穀旅行し。おつた民を賑ひ又洲崎より行者の  
石屋堀内身軀を遣り。物あむ寄進して。急指ののり。小道橋を造り  
お人々よこよる功徳といひる。おかくも福小や五十子伏姫の四十九日  
向とまよもく。嫡男長成朝臣を詔主とて。瀧田より善菩提院小大歛忌の  
法事あり。とやまへ比長成ハこの法筵よ、大坊をも召加へよとて。使瓜  
富山へ遣さし。ふ、大の山よをまるとるぬ。その内彼此を索る小樵夫小か  
中。件の法師ハ豫とよと準備とを造らせ。及を脊負ひ錫杖を嚮鳴じ  
今朝し。山へ下ると。吾們瓜入久とて。瀧田殿より入道瓜尋ねさせ

るあらこのゆやせといひくけく。何れと云く、おとゆねのひびく。後せのたゆま  
 ドといふ。まどろく。使者ハ瀧田へ立入り、輝の趣をヤセ、久米実嘆賞大りこ  
 ろも、渠既ハ誓ひら。六十餘國ハ偏歴をく、飛去るハの珠を舊の珠敷に  
 繋ぎ、笛か入生涯安房へかへしと豫ていひらるとあれ、再會定ハ揣に、遺憾と  
 かるるといふ。再て彼方を索殺めり。このとら、海小絶まや  
 ありけん、大坊が恙あり、ぬまあるとあり、渠がよまがふら、として、明年  
 伏姫の一周忌の比、まどろく富山ハ一宇の観音堂を建立し、伏姫の徳を、八  
 房がうさへ、紀と。姫の遠書り、共ハ厨子のうちへぞ納め、今ハ富山ハ  
 観音堂あり、かくて野の年ハ歴とも、大坊が音信は、畢竟彼法師が  
 久後いん、その後ハの巻より、解るん。  
 作者云、去の書筆輯第一巻より、今この巻ハ至らん、則一部小説乃

用場ハ士出現の幾端あり。是ハ上次の巻ハ年月相次び、いと後の  
 るゆな、その間ハ物語る、譬ハ彼水滸傳ハ龍虎山まで、洪信ホガ  
 石碣を、段より、林沖ホガ出現せ、その間、数十年物語る、たじ  
 又いふこの巻の出像の中、金瓶大輔孝徳が川原、海を國の、文外の画  
 画中の文入、この出像ハ、忽ち、雲霧の暗、海を、知は  
 ろ、又使女の急、松ハ柏田、檢織を、其の在、先ハ、その、  
 後ハ、首尾、借乱ハ、其の、其の、其の、其の、  
 人の口中、其の、其の、其の、其の、其の、其の、  
 考、其の、其の、其の、其の、其の、其の、  
 の、其の、其の、其の、其の、其の、其の、  
 里見八犬傳第二輯卷之二終

